

映画『八重子のハミング』は、ディノスシネマズ札幌（中央区南3条西1丁目 Tel011-221-3802）にて**6月17日（土）**より上映です。上映時間等の詳細については、6月14日以降にご確認ください。人とのつながり、家族のきずな、夫婦の愛、認知症への理解、多くのことを訴えかける映画です！中高年層のみならず、若い世代にこそ観てほしい。ご家族やお友達を誘い劇場へ行きませんか！映画の感想等 Facebook や Twitter に投稿し、「八重子のハミング」を拡散していただければ幸いです。

## 八重子のハミング

## 映画アドバイザー ミヤザキタケル

山口県 萩市が舞台。アルツハイマー病を患う妻との介護生活を綴った陽信孝の著者を映画化。

「やさしさの心って何？」と題された講演会の壇上に立つ老人 石崎誠吾（升毅）は、今は亡き妻 八重子（高橋洋子）と共に過ごした12年もの介護生活を語り出す。二人が過ごした激しくも穏やかな日々を通し、人の善意・愛を描いた作品だ。

もう我慢できないから初めに書く！  
この作品に出逢うことができ本当に良かった。

ぼくはこれまで生きてきた30年間において、介護と呼べるものに一度も携わったことがない持病の群発頭痛に関しての苦しみなら分かるけど、ガンやアルツハイマー 介護等のリアリティはこれっぽっちも湧いてこない。

あらゆる病気が身近に感じられる年齢に達した人  
介護に携わった経験のある人  
そういった人でなければ、胸に刺さりにくいタイプの作品なんじゃないかと思っていた。八重子に自身の母を重ねることで、ようやく作品世界へ入門できた気になっていた。

だが、そうじゃない。それも一つの手かもしれないけど、そんなことをする必要なんて端からなかった。

家族 パートナー 友人、誰だっていい。  
大切だと思える人がいるのなら 他者を想う気持ちを宿しているのなら、必ず突き刺さる。  
つまりは、人である限りこの作品は万人の胸を打ち貫く。

講演会で語られる誠吾と八重子の半生  
悪化の一途を辿る介護生活  
二人を取り巻く周囲の想い  
八重子の好きだった歌 花 場所  
彼女のハミング

気が付けば観入っていた。観ているのがツラくて、何度も何度も目を背けなくなった。中盤あたりからは、泣きながらスクリーンを眺めるのが当たり前となっていた。

でも、その涙の源泉は 胸の痛みによるモノだけではない。あなたやぼくが生きる日常の中にだってあるはずのモノ。日々の生活や目先のことに囚われ、ついつい見失いがちなモノ。時に傷付き、「んなもんねえよ！」と蔑ろにしてしまうモノ。

深い怒りや悲しみが描かれると共に、それを凌駕するだけの優しさが 善意が 愛がこの作品には満ち溢れていた。

人っていいなって 捨てたもんじゃなくなって。美しいなって。結果はどうあれ、他者に歩み寄るその一歩には 優しさ

しか詰まっていなかった。そんな輝きに照らされ、土石流のように涙がこぼれ落ちた。  
誠吾と八重子 家族や友人達は、ぼくらと同じ現実世界を精一杯に生きていた。物語の登場人物としてではなく、同じ世界を生きる隣人にしか見えなかった。彼らが抱く葛藤の一つ一つが、何もかもを信じさせてくれた。

途絶えることのない悲しみの連鎖

悲しみを和らげる善意

その果てに目にするのは、夫婦の一つの到達点

付き合ったって、同棲したって、結婚したって、必ずしも辿り着けるとは限らない。これこそ「愛」なんだと確信できた。究極の「愛」を目の当たりにした。

これといって大仕掛けがあるわけじゃない。

ド派手なアクションもない。

キュンキュンしちゃう恋愛もない。

そこにあるのは人の心のみ。

誰もが持つ心の揺らぎを丁寧に描いていくだけ。

それだけで魅せられてしまうことがスゴいんだ。

介護経験の有無によって、入り込める領域の深さが異なってくる。経験無しでは、劇中で描かれない介護の裏側までは補完し切れない。本当の意味で介護を理解したとは言いがたい。が、そんなぼくでも感じられたことがある。

人の善意を足蹴にしてはならないということ。

自分も善意を胸に人と接していこうということ。

ぼくのことを気にかけて 良く思ってくれる人には、せめてしっかりと応えていこうと。

八重子と向き合う誠吾の姿に、学ぶことがたくさんありました。

そんな日が来ないのが一番だけど、いつか訪れるかもしれない介護の日々。

介護する側なのか、される側なのか。両親なのか パートナーなのか 自分自身なのかは分からない。

覚悟のしようもないけれど、誠吾と八重子の姿に希望を抱けた。

このレビューをキッカケに、一人でも多くの方が劇場へ足を運んでくれたのなら嬉しいです。

劇場数的にも キャスト的にも 題材的にも、若い人の心のアンテナには引っかかりにくい。

しかし、観れば分かる。観て良かったと思えるはず。

こういった作品が求められる世の中になることを、こういった作品を求めて止まない観客が増えていくことを願います。

ぜひ劇場でご覧ください。

**大切な人に伝えたい！**

映画を観てこんなに泣きっぱなしだったことは今までありません。しかも二日連続で映画館に足を運んだのも初めてです。1回目と2回目で感じ方が違いました。2回目の方がより深く、色んな感情や思考を持ちながら観ていました。『八重子のハミング』は心に響きます！観る人にとって色んな響き方をするんだなあ勝手に思っています。私の周りにいる大切な人たちには絶対観て欲しいです。そして感じたことを語り合いたいです。なので、一人でも多くの人に伝えようと思います。

**まだまだ…ではなく、**

夫婦、介護…私にはまだまだ遠い話かな？と、どこか俯瞰してしまいがちな内容だと思っていましたが、どんな世代にも考えさせられる映画だと思います。当たり前前に伝えられる事がどれだけ有り難い事か、大切な人に寄り添う事の意味を映画を通して深く考えさせられました。この映画をたくさんの人に伝え、優しい温かい気持ちをもちたいと改めて感じました。

**映画を観た 19 歳 OL の感想①**

人の助けや優しさでこんなにも相手を支えることができるのだと思いました。長女の子どもや教え子が積極的に介護の手伝いをしようとしていたり、近所の人が声をかけていたり、少しのことで大きな力になっているのだと分かりました。私は一緒に住んでいる祖父母に強く当たってしまっていたので接し方に気をつけようと思いました。お世話になった方や近所の困っている人には自分から声をかけて少しでも力になれるようにしたいと思います。

**映画を観た 19 歳 OL の感想②**

八重子さんの夫の愛情の大きさにすごい感動しました。私もあんな夫婦になりたい！！って思いました！！お互いが優しさを持って生活できるような家庭を作りたいです。それと、母のことも考えました。今、母が父型の祖母の介護を時々していて、疲れのせいか少し物忘れがひどくなっている気がしています。私は母に何度も同じことを聞かれて、イライラして強い言い方になってしまう時があります。この映画の夫の姿を見て考えさせられるものがありました。ここ2年ぐらい自分の感情のまま行動してしまっていることがあったので、もっと落ち着いて相手のことを考えてるようにしなきゃなと思いました。いつもあまり観ないようなジャンルの映画で、すごく観れて良かったです。

**一人そしてまた一人優しさが伝わりますように**

「頑張りすぎて折れないように。身近な人に頼ることも優しさ。」と私に気づかせてくれました。いつもの自分をちょっとだけ振り返り、ちょっとだけ反省し、ちょっとだけ人に優しい気持ちになれて、ちょっとだけキュンとして・・・、ちょっとだけ明日も頑張ろう！って思える映画だと思います。八重子のハミングが今も私の脳裏で流れています。「優しさに限界はないのよ」と。この映画も何処までも羽ばたき、一人でも多くの人に届けられますように。

**若い人にこそ見てほしい映画です。**

妻がこのような状況になったら、果たして同じように介護できるのかと考えました。しかも自分自身の命も明日、どうなるか分からないような状態です。「怒りには限界があるが、優しさには限界はない」妻をはじめ、家族に対してもっと優しくしよう、大事にしようと思わせてくれる心が暖くなる映画でした。この歳で、このような素晴らしい作品に出会えて幸せです。若いご夫婦、恋人同士にこそ、ぜひ、ご覧になって頂きたい映画です。身近な人を現在よりもっとかけがえのない大切な存在と感じれるはず。最後まで暖かい涙が溢れ続け、心が浄化される映画でした。

**「絶対に観た方がいいよ！」と回りに言ってます。**

この映画を観たことで それまでの私の中の常識、「その時が来たならば、自分で看れるはずはないのだから どこか良い施設を探してほしいしかない。」が音を立てて崩れました。そして、人生設計を大きく変えることにしました。この映画に出会えた事に心から感謝しています。1人でも多くの方々がこの映画を観る機会に恵まれますように。

**人にとって大切なものがみえてくる映画です。**

三世代で鑑賞しました。  
「認知症」は誰にでも起こる「病気」。  
「認知症」の人の心を開く鍵は「音楽」。  
「認知症」の人を支えているのは「家族」と「地域」。  
「認知症」の人のケアだけでなく「家族」のケアも大切。  
未来を担う子供たちに、人を思う優しい心が育つことを願います。映画を見終えて、ほっこり温かな気持ちになりました。あらゆる年代の方に観ていただきたい映画です。

**この映画、広がらないと**

介護保険もまだない時代、若年性アルツハイマーに対する理解も少なかった時代、こんな介護をした夫婦がいたんですね。まさか、夫のガンから物語が始まるなんて…。知識とか、制度とか、そんなことより「相手の想い、人間としての尊厳を最優先に考えたら、こうなった」という12年。長女夫婦、孫たち、結婚する次女、さらに教え子たち、町の人々、親友であるお医者さん、知り合いだった市長。教育者であり、宮司でもあった主人公の人柄もあったでしょうが、この夫婦に関わる皆が、“限界のない優しさ”を教えてくださいました。この映画が広がっていかないようだ、日本はだめです。出演したすべての俳優、関わったすべての人たちが誇りをもって「特別な作品」といえる映画です。

**誰もがその人らしく生きていくために。**

『八重子のハミング』を観てから高齢の母のことをたくさん考え続けています。母娘と夫婦では違ってもかもしれませんが、母は自分に介護が必要になったら施設に入る、と言って聞きません。先生ご夫婦が愛されていたからこそ地域の協力が得られたのかな、と…。〈お互いさま〉が当たり前になったら、誰もがその人らしく生きていけるのに。人と人のつながりを社会に問う作品でもあると思いました。そしてたくさんの方々の気持ちを動かす力を持つ映画だと思うので、1人でも多く映画館に足を運んで欲しいです。